

第91回麻布獣医学会 一般学術演題6

犬の耳管に対する細径内視鏡を用いたカテーテル留置法

○中野 正大, 金井 詠一, 茅沼 秀樹, 山田 一孝

麻布大学 獣医放射線学研究室

【背景】

犬の中耳炎は遭遇する機会の多い疾患の一つであり、時に治療反応に乏しく慢性化することがある。中耳炎の慢性化は、耳管の機能不全による耳道環境の変化が一因であると示唆されている。中耳炎に対する従来の治療法は、耳洗浄や抗生剤の投与といった内科的治療法と外耳道切開術や内側鼓室胞切開術などの外科的治療法が選択されている。しかし、これらの治療法では、耳管に対する施術は行えていない。

【目的】

内視鏡を用いて耳管にカテーテルが留置可能であるかを検討した。

【方法】

第一実験はビーグル犬の屍体2例に対し、内視鏡下にて耳管へカテーテルが留置可能であるかを検討した。実験方法は、犬を伏臥位で保定し、内視鏡を鼻孔より挿入して耳管開口部を確認した。20Gの留置針を軟口蓋から耳管開口部へ向かって穿刺し、外筒のみを耳管へ進入させた。留置した外筒内に0.025インチのガイドワイヤーを通し、鼓室胞内まで進めた。内視鏡を外耳道より挿入し、鉗子を用いて鼓膜の穿孔を行う。鼓室胞内のガイドワイヤーを、鉗子を用いて外耳道の外まで引き出した。外耳道側から5Frの栄養カ

テーテルをガイドワイヤーに沿わせて耳管開口部まで挿入した。カテーテル先端が耳管開口部で確認されたら、ガイドワイヤーを外耳道側から引き抜き、鉗子を用いてカテーテルを鼻孔から取り出した。

第二実験は正常ビーグル犬4例に対し、全身麻酔下で第一実験と同様の手技を用いて内視鏡下にて耳管へカテーテルが留置可能であるかを検討した。

【結果】

第一実験の結果、内視鏡下で全例において咽頭鼻部の10時と2時方向に白色でスリット状の耳管開口部が確認され、耳管内へカテーテルを留置することが可能であった。第二実験の結果、第一実験と同様に、内視鏡下で全例において耳管開口部が確認でき、耳管内へカテーテルを留置することが可能であった。

【考察】

内視鏡下にて耳管内へカテーテルを留置することは、今回実施した手技を用いることで可能であった。今後は長期間カテーテルを留置し、耳道や鼓室胞内を洗浄することで、今回の手技の有効性、安全性を検討すべきである。また今回の手技は耳管へのドレナージが目的であるので、耳管の機能改善を目的として、バルーンによる拡張やステントの留置も検討するべきであると考えられた。